

サンクチュアリ教会およびUCIを支持する人々の言説の誤り(6)

サンクチュアリ教会は、真のお父様のみ言と伝統が真のお母様によって覆

されていると主張し、お母様のなさることをことごとく否定しています。また、

UCI(いわゆる「郭グループ」)は、日本で集会を行って『統一教会の分裂』

(日本語訳)という書籍を広めていますが、その書には誤訳やみ言改竄が散見

し、お父様とお母様が分裂しているかのように論じています。彼らの主張は、

真のお父様が真のお母様と共に立ててこられた勝利圏を否定するものであり、

真の父母様を中心とする統一家の一体化を損ねるものです。前回に引き続き、

UCI側を支持する人々の言説の誤りを指摘していきます。なお、これらの内容を総合的に理解し把握するためには、「真の父母様宣布

文サイト」(http://trueparents.jp/)の掲載文や映像をごらんください。教理研究院

注、真の父母様のみ言や「原理講論」は「青い字」で、UCI側の主張は「茶色の字」で区別しています。

五、UCI側が広める金鍾奭著『統一教会の分裂』の虚偽を暴く(3)

金鍾奭氏が主張する「アイデンティティ」の誤り・その2

【問題点その③】真の家庭のアイデンティティの誤り

(1)真の家庭を、真の子女様家庭としている誤り

「一次目的」「真の父母出現の理由」であり、「神様の第一の理想」「人類を代表する家庭」「モデル的家庭」「真の愛、真の生命、真の血統を具体化する家庭」「全人類に接ぎ木する家庭」であると主張します。

彼らが主張する「真の家庭のアイデンティティ」は、真の父母様が絶対中心ではなく、神、父母、子女の三代目である真の子女様家庭を、

「真の家庭」直系家庭であると定義するのです。顕進様は、その著書『神様の夢の実現』でも「祝福家庭として皆さんのアイデンティティは

神様、真の父母様、そして真の家庭の縦的な軸に連結されることによって始まる」(『統一教会の分裂』65ページ。注：『神様の夢の実現』の日本語訳は26

1ページ)と述べ、ここでも「真の父母様」と「真の家庭」を分けて語っていることからその事実が理解できます。さらに

顕進様は、二〇一一年十二月一日の韓国GPCでも、「真の父母と真の家庭の出現は、アダム・エバ家庭が成し遂げられなかった神様本然の真の愛のモデル家庭を回復し、地上に天国を成すためにある」(『統一教会の分裂』302ページ)と述べ、

「真の父母」と「真の家庭の出現」を分けて語っています。彼らがいいう「真の家庭」とは「直系家庭」文顯進家庭を指しているのです(同、315ページ)。

拡大された真の家庭』に連結される絶対者の血統の拡大過程において創始者の真の家庭(直系家庭)の責任を強調した。彼らにとって「真の家庭」は、完成すべき復帰摂理の一次目的であり、真の父母出現の理由であり、人類全体が志向すべき神様の第一の理想である。……真の家庭は人類を代表する家庭であると同時に人類のモデル的家庭であり、復帰摂理の為に全ての犠牲を甘受しなければならず、神様の理想実現の為の実体的生き方を生きたければならずと彼は主張する(63ページ。太字は教理研究院による。以下同じ)

「現在、文顯進は、前に言及した通り、『神様→真の父母→真の家庭→拡大された真の家庭(祝福家庭)』と繋がる血統復帰の価値を固守しており、超宗教的な奉仕と理想家庭実現の為に平和理想世界実現運動を『One Family Under God』の名前で

展開している。ところが、文顯進も真の家庭(創始者の直系家庭)の血統が全人類に伝授される(何らかの)儀礼としての手段が必要だったものと見られる。それ故か、二〇一五年六月に米国シアトルで祝福結婚式を主管したという。推測すると彼は、創始者が今まで示してきた血統復帰の為の伝統や儀礼を、普遍的で世界化された儀礼にデザインし直して引き継いでいくように見られる(66ページ)

「神様の血統」が「神様→真のお父様(創始者)→真の家庭(文顯進家庭)→統一教会の祝福家庭→人類」につながる「血統復帰信仰」も強く要求しているという事実注目しなければならぬ(315ページ)

彼らは「真の家庭のアイデンティティ」を「直系家庭」と定義しており、この「真の家庭」直系家庭」こそが「復帰摂理の

(2)「三代圏」の中心は真の父母様であって、真の子女様ではない

ここで明確にしておかなければならないことは、真の家庭の「三代圏」の中心は、人類の真の父母であられる「祖父母(真の父母様)」という点です。

三代圏の中心は子女様でも、お孫様(四代目)でもありません。【図1】を見れば分かるように、神から始まる三大王権が、

真の父母を中心として展開されていく「三代圏」に対して、真のお父様は次のように語っておられます。

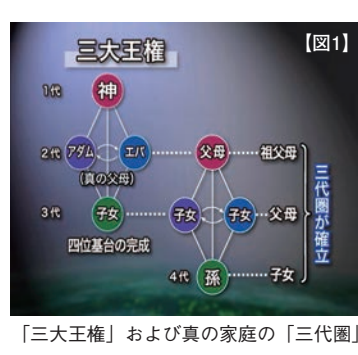
「おじいさん、父、自分たち夫婦が、三大王権を象徴します。おじいさんは過去を象徴し、父母は現在を象徴し、自分たち夫婦は未来を象徴します。そして、おじいさんは霊界の特権大使として自分の家庭に送られた方なので、おじいさんの言葉に絶対服従する家庭は繁栄します」(八大教材・教本『天聖経』234

8ページ)

「神様は祖父母の位置であり、アダムは父母の位置であり、子女は息子、娘の位置です。同じように、皆様の家庭でも三代が一つの家庭に安着すれば、祖父母は、天上天国の神様の位置であり……」(『平和神経』314

ページ)

さらに『原理講論』は、神様の創造理想が完成した天国について、「天国においては、神の命令が人類の真の父母を通して、すべての子女たちに伝達される

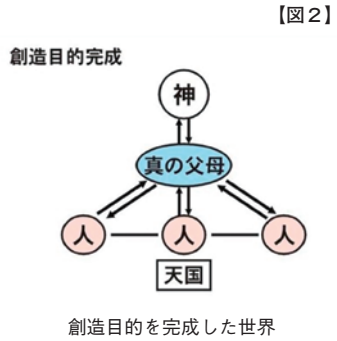


「三大王権」および真の家庭の「三代圏」

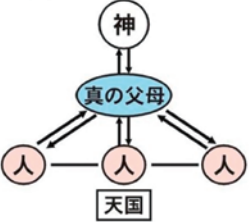
ことにより、みな一つの目的に向かつて動じ静まるようになる」(69ページ)と論じています。

創造理想を完成した世界(天国)における永遠の中心は、神様と完全一体になった人類の真の父母様であって、その真の父母を中心にして「一つの目的に向かつて動じ静まる」世界こそが理想世界です。その中心は真の父母であって、真の子女様ではありません【図2】。

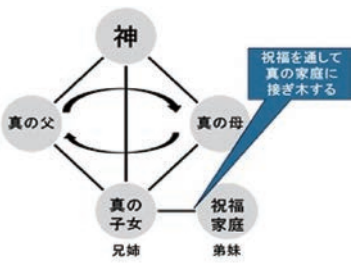
顯進様は、本然の血統であり、真の家庭の一員ではありませんが、み旨の中心ではありません。人類の罪悪歴史の蕩滅復帰も、人類の救済も、天国の再創



創造目的の完成



【図3】



桜井正実氏による講義の図

庭に、祝福を通して真の家庭に接ぎ木されるんだということなんです。真の父母という言葉自体も、真の子女様を前提にしている言葉であります」

桜井氏はこのように説明し、次のみ言を引用します。「メシヤの使命は、そこで終わるのではありません。真の父母の位置まで進んで、絶対的真的家庭を探し立てなければなりません。この真の家庭を中心として、神様の創造理想を完成した地上天国と天上天国を創建することができるのです。この目的のために墮落の末裔である60億人類は、

造も、人間始祖の立場である真の父母様によって蕩滅復帰され、完成、完結、完了するのです。それを神学的に表現すれば、キリストを抜きにして完全な神認識も救いもないということになります。

天国の永遠の中心は、どこまでも神様と完全一体となられた真の父母様(天地人真の父母様)です。したがって、真の家庭の三代圏(三大王権)は、真の父母様に直結してこそ意味があるのであり、神の創造理想を成し遂げることができるのです。

ところが、『統一教会の分裂』は、「真の家庭の中でこそ、真の愛、真の生命、真の血統を具体化することができる」と主張し、直系家庭である真の家庭(文顯進様家庭)こそが真の愛と真の生命と真の血統を具体化した家庭であるとし、「神様の血統」は「神様↓真のお父様(創始者) ↓真の家庭(文顯進家庭) ↓統一教会の祝福家庭 ↓

その誰も例外なく、出来が良くても悪くても、黒人でも白人でも例外なくメシヤの真の家庭に接ぎ木されなければなりません。絶対的的要件です」(マルスム選集478-285)

さらに、桜井氏はDVDの1巻目の23分53秒から、「父の血統と権威を代表する長子が立つことによって、お父様一代で地上天国を成すことができなかつたとしても、それを受け継ぐ父の血統と権威を代表する長子が立つことによって、摂理的中心人物という求心点をもって理想世界を創るその摂理を続けていくことができるわけだ」と語っています。この主張は『統一教会の分裂』と同じです。UCI側は「祝福を通じて真の家庭に接ぎ木される」と主張しますが、彼らが言う真の家庭とは顯進様家庭であり、その子女様家庭に接ぎ木されることで、血統復帰がなされると考

人類」(315ページ)としてつながっていくと主張します。この主張は、「祝福」が真の父母様に接ぎ木(重生)されることで救われるのではなく、「真の家庭=直系家庭」である子女様に接ぎ木されることで、墮落人間の血統復帰が成され、人類が救われていくかのような主張になっています。これは、真のお父様のみ言と異なる誤った言説です。

顯進様は、真の父母様の許諾を受けないで「二〇一五年六月に米国シアトルで祝福結婚式」(66ページ)を挙行しました。その言動からも、この真の家庭のアイデンティティという誤った認識に基づいて行動している事実が分かります。

そして、この誤った真の家庭のアイデンティティゆえに、『統一教会の分裂』は「今のままでは、韓鶴子以降の統一教会が真の家庭(直系家庭)のない統一教会になることは明らかだ」

えているのです。ところで、桜井氏が引用したマルスム選集のみ言(478-285)は、真のお父様が二〇〇四年十二月二日に語っておられる「真の父母は神様と人類の願い」の講演文を、お父様ご自身が解説しながら語られたみ言です。

桜井氏はそのみ言を引用し「メシヤの真の家庭に接ぎ木」と述べてますが、その「真の家庭」が何を指すのか、真のお父様のみ言によって明確にしなければなりません。み言のもととなる「講演文」を以下、引用します。「メシヤの使命はここで終わるのではないのです。真の父母の立場まで進んで、絶対的真的家庭を建てなければなりません。この真の家庭を中心として、神様の創造理想を完成した地上天国と天上天国が創建できるのです。この目的のために墮落の末裔の60億の人類は、誰も例外

(321ページ)と主張しているのです。

(3) 桜井正実氏の「祝福家庭特別セミナー」の主張の誤り UCI側が開催する「祝福家庭特別セミナー」の HALF デイで、桜井正実氏は【図3】を使って「祝福を通して真の家庭に接ぎ木する」と講義しています。この【図3】で「祝福を通して真の家庭に接ぎ木する」と表現している「真の家庭」とは、すでに前項でも述べたように、真の子女様家庭のことであり、具体的には、顯進様家庭を指しています。

桜井正実氏の HALF デイセミナー DVD の 1 巻目の 11 分 50 秒あたりから、彼は次のように語っています(以下、ディクテーション)。「真の父母様だけでは、祝福は行うことができない。真の父母様に真の子女様がいてこそ祝福を行うことができる。真の家

なくメシヤの真の家庭に接ぎ木しなければなりません。心情的な接ぎ木はもちろんです、伝統的な接ぎ木をしなければなりません。それなら、どのように接ぎ木をするのでしょうか。皆様すべては墮落性を持って生まれた野生のオリーブの木です。野生のオリーブの木は百年千年を待つても、真のオリーブの木に変わる突然変異は起きないのです。永遠に野生のオリーブの木として残るだけです」(二〇〇四年十二月二日の講演文)

桜井氏は上述の講演文のうち、お父様が「メシヤの真の家庭に接ぎ木しなければなりません」までを解説された箇所を引用しています。ところが、桜井氏が引用していない続きの部分に、お父様が「接ぎ木」について解説された箇所があります。以下、その部分を引用します。(注、講演文は太字ゴシック、それに対するお父様の解説は明朝体)

「……『同じように、墮落した人類は罪悪のサタン世界と完全に絶縁して、真のオリーブの木であられる真の父母を通して真のオリーブの芽を植える』接ぎ木されるのです。『結婚祝福を受けて、真なる血統を出発させなければならぬのです。そのようにして出発した真の血統は、真のオリーブの実である真の子女を生産するようになるのです。墮落人間としては、この道だけが真の父母の愛を通して再び生まれ、真の生命、真の愛、真の血統を相続できる唯一の道なのです。このように、真の子女が生まれて真の父母ができれば、自動的にそこには真なる家庭が定着するのです。ここからまさに真の家庭主義が創出されます』……」(マルスム選集478-285)

真のお父様は、「メシヤの真の家庭」に「どのように接ぎ木をするのでしょうか」と尋ねら

れ、その答えとして「墮落した人類は罪悪のサタン世界と完全に絶縁して、真のオリーブの木であられる真の父母を通して真のオリーブの芽を植える」と講演文を読まれ、「接ぎ木されるのです」と解説しておられます。ここで言う「メシヤの真の家庭」とは、真のオリーブの木である「真の父母様」のことであり、子女様家庭ではありません。ゆえに、真の家庭を「直系家庭」とであると定義する「真の家庭のアイデンティティ」は誤りであるのが分かります。

(4)「重生」は、真のオリーブの木であられる「真の父母」によつてなされる

さらに、真のお父様が語られる「真のオリーブの木」が何を意味するのか、み言に基づいて理解しておかなければなりません。

「墮落人間が生命の木となるためには……創造理想を完成した一人の男性が、この地上に生

命の木として来られ、すべての人をして彼に接がしめ、一つになるようにしなければならぬ。このような生命の木として来たり給うたお方が、すなわちイエスであった」(『原理講論』95ページ)

「天の真の血統をもってこられた真の父母様を通して祝福結婚を受けることが、正に真のオリーブの木に接ぎ木される恩賜です」(『平和神経』34ページ)

このみ言から分かるように、

「メシヤの真の家庭」に接ぎ木されなければならぬと語られるその真の家庭とは、真の子女様家庭ではなく、真のオリーブの木「真の父母様」です。祝福は、真のオリーブの木であられる真の父母様に接ぎ木されることによつて成されるのです。UCI側は「祝福を通して真の家庭に接ぎ木される」とは「直系家庭の文顯進様家庭

に接ぎ木される」ことと主張しますが、その言説は誤りであることを知らなければなりません。「祝福」を通じた「重生」に関するみ言を『原理講論』および「祝福家庭と理想天国(Ⅰ)」から引用します。

「父は一人です。どうして子女を生むことができるだろうか。墮落した子女を、善の子女として、新たに生み直してくださるためには、真の父と共に、真の母がいなければならぬ」(『原理講論』264-265ページ)

「イエスは自ら神を中心とする実体的な三位一体をつくり、霊肉共に真の父母となることによつて、墮落人間を霊肉共に重生させ、彼らによつて原罪を清算させて、神を中心とする実体的な三位一体をつくらせるために再臨されるのである」(同、268ページ)

「父母に似るためには、接ぎ

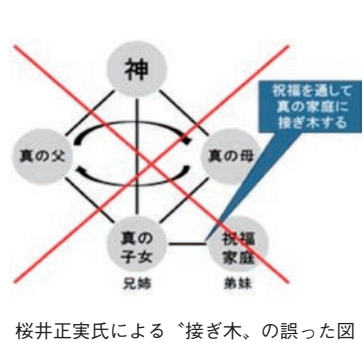
木する役事をしなければなりません。ひっくり返して接ぎ木しなければなりません。……それは父母から始まったので、父母を通して清算されなければなりません。それで、真の父母に接ぎ木しなければならぬというのです」(『祝福家庭と理想天国(Ⅰ)』697-698ページ)

これらのみ言は、墮落人間が「真の父母」によつて重生されることを明確に述べています。『原理講論』は、重生や原罪清算について「霊肉共に真の父母となることによつて、墮落人間を霊肉共に重生させ、彼らによつて、原罪を清算させて、神を中心とする実体的な三位一体をつくらせる」と論じます。ここで言う「彼ら」は、神様を中心とした実体的三位一体であられる真の父母様です。『祝福家庭と理想天国』には「父母に似るためには、接ぎ木する役事をしなければなりません。……真の

父母に接ぎ木しなければならぬ」とあります。墮落人間が重生され、原罪清算できる唯一の道は、真の父母様に接ぎ木されることです。決して、真の子女様ではありません。真の父母様こそが「真のオリーブの木」であり、「真の家庭」の絶対中心です。

ゆえに、今後、もし真のお母様が聖和されることがあったとしても、「祝福」の絶対中心は、永遠に神様と真の父母様であり、血統転換は真の父母様を通してなされていくのです。神様と一体となられた真の父母様が天上・地上天国の永遠の中心です。したがって、『統一教会の分裂』が主張するような、「今のままでは、韓鶴子以降の統一教会が真の家庭のない統一教会になる」(321ページ)は、ありません。

UCI側は、真の父母を絶対中心とせず、真の子女様家庭にアラインメント(方向性を合わ



桜井正実氏による「接ぎ木」の誤った図

せて一つになる)することだけを力説し、真の父母様不在の「真の家庭のアイデンティティ」を主張しているために、以上のような誤った言動とならざるをえないのです。

桜井正実氏が講義で使用している図は、誤りであることを明確に理解しなければなりません。真の父母様が、絶対、唯一、不変、永遠なる存在であり、真の父母様を通じてこそ墮落人間は重生され、新たに真の子女として誕生し、真の家庭(祝福家庭)となるのです。

ところが、桜井正実氏がUCI側のセミナーで使用する図

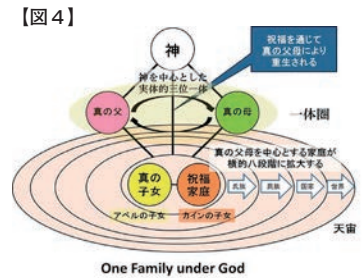
は、祝福家庭の位置が真の父母様と関係を結んでいないだけでなく、真の子女様だけに待る表記になっています。そして、祝福を通じて真の子女様家庭である文顯進様家庭(真の家庭)に接ぎ木するという誤った説明がなされる始末です。

UCI側の、真の家庭を「真の子女様家庭」とする誤った解釈による、真の父母を絶対中心としない「真の家庭のアイデンティティ」は、真の父母様の亡き後の地上の「統一家」の在り方として、み言を正しく理解しない食口のみならず、信仰歴の長い諸先輩さえも信仰の混乱に陥らせる要因となりかねません。私たちは、UCI側の主張する真の父母を絶対中心としない「真の家庭のアイデンティティ」に惑わされてはなりません。

(5) 祝福家庭がアラインメントすべきは、「天の父母様―真の父母様」である

——桜井節子氏による「信仰告白」の映像の問題点

桜井正実氏が主張する「真の子女様家庭」に「接ぎ木」するという誤った理解による図を、正しく表現するとすれば【図4】のようになるでしょう。



【図4】 祝福を通じて「真の父母」により重生される様子が 直接的なお兄様です

「祝福」による「接ぎ木（重生）」とは、あくまでも真の父母様によってなされるのであって、真の子女様ではありません。家庭連合から脱会を表明した桜井節子氏（四十三双）は、UCI側が公開した映像で次のように語っています。

「息子の正実と話していたときにですね、顯進様の基盤となるべき第一の責任は、私たち四十三双にあつたんではなかったかと思いました。……なぜならば、私も四十三双が祝福にあずかったとき、お母様のお腹のなかにいらしたかたが顯進様でございました。ですから、私ども四十三双にとりましては（顯進

桜井節子氏が、こう述べた背景には、桜井正実氏の講義図の「祝福を通して真の家庭（真の子女家庭）に接ぎ木する」という誤った認識、さらには真のお父様が語られた重生（生まれ変わる）に関する次のみ言があつたものと思われます。

「既に肉身をもつて生まれ成長してしまった私たちは、文字どおり完成したアダムの体中の種の立場に戻ることはできません。それゆえ私たちは真の父母、およびその父母から生まれ

た真の子女と一体化することによって、生まれ変わるための条件を立てていくのです。カインがアベルに完全に屈服することによって、両者がすべて復帰されるという原理があるので、この原理により私たちカインの立場にある人間は、アベルの立場にある真の父母、罪のない真の子女と一体化しなければならぬのです。彼らと一体化することによって、私たちは復帰された子女として同じ恵沢を受けることができるのです。……女性は真の娘と一つにならないといけません。それでは男性はどうでしょうか。真の父母とその真の息子と一つにならないといけません」（真の御父母様の生涯路程④ 107〜108ページ）

と思われます。しかし、祝福家庭が、真の子女様と一体化する条件を立てるのは、どこまでも「真の母」の胎中を通過して、「真の父」の骨髄にある種の立場に入っていくためであり、真の子女様によって生み変えられるものではありません。

重生（接ぎ木）に関して、真のお父様が「子供はどのようにしてつくられますか。お父さんとお母さんを通してつくられます。皆さんは、お父さんの骨の中と、お母さんの腹の中を通してつくられたことを知らなければなりません」（祝福家庭と理想天国（I） 689ページ）と語っておられるように、どこまでも「真の母」の胎中を通過して生み変えられるのであって、真の子女様が私たちを生み変えてくれるわけではありません。

事実、一九八八年の六五〇〇双の祝福、さらには、世界的祝福である三万双、三十六万双、四千万双、およびそれ以降の祝

福において、真の子女様が「真の母」の胎中に宿っておられたわけではありません。しかし、六五〇〇双以降の祝福も重生は成されているのです。

【図4】を見ると分かるように、重生（接ぎ木）は、神様を中心に実体的三位一体をなして

おられる「真の父母様」によってなされ、そうして生み変えられた祝福家庭はカインの子女となり、直系のアベルの子女様と兄弟姉妹の関係なのです。

UCI側は、真の子女様家庭とのアラインメントを力説しますが、私たちが本当にアラインメントすべきかたは神様と真の父母様です。真のお父様は次のように語っておられます。

「神様と真の父母に侍らなければなりません。神様と真の父母が縦的な父母と横的な父母であり、二つの父母が一つになることによって、初めて私が出てくるのです。神様は縦的な父母であり、完成したアダムとエバ

は横的な父母であつて、この二つの父母が一つになったその上で統一が成され、天国と神様が連結されるのです。ですから、神様と真の父母に侍らなくては何できません」（八大教材・教本『天聖経』2316ページ）

真のお父様が、「神様と真の父母に侍らなくては何もできません」と語っておられるように、神様―真の父母様―祝福家庭というように、私たちが重生（接ぎ木）してくだされる真の父母様にしっかりとアラインメントしなければならぬのです。

桜井正実氏が描く【図3】は、『原理講論』の論じる「創造目的完成」を表す【図2】と一致しません。一方、神様と真の父母様を中心とする「人類一家族世界（One Family under God）」を表現する【図4】は

【図2】と一致しています。創造理想世界は、「神の命令が人類の真の父母を通して、す

べての子女たちに伝達されることにより、みな一つの目的に向かって動じ静ずる」（『原理講論』69ページ）世界でなければなりません。しかし、桜井正実氏が描く図は子女様を中心としているために、そのような世界になっていないのです。

私たちは、子女、孫、ひ孫へと何世代を経ても、また何百年、何千年、何万年を経ても、神様と真の父母様を絶対中心として一つになることが「原理」の教えであり、不変の原理原則なのであつて、世代が移るたびにその「中心」が真の子女様、お孫様、ひ孫様へと変わっていくのではありません。もし「中心」が移り変わっていくとするならば、その世界は分裂と闘争の世界とならざるをえません。真のお父様は次のように語っておられます。

「アダムもエバも神様をお父さんと呼びます。では、その子女たちは神様を、おじさんと呼びますか、おじいさんと呼びますか。

お父さんと呼びます。相対対うのは、平等なものです。神様の愛を横的に繁殖し、その愛の価値を完成しなければなりません。完成した愛の価値は、一つです。平等なのです」（八大教材・教本『天聖経』551ページ）

真のお父様が語っておられるように、私たちも、私たちの子女の世代も、さらに孫もひ孫の世代も、何世代を経ようが、永遠に変わらぬ神様を「天の父母様」と呼び続けていくのです。

「人類一家族世界（One Family under God）」は、神様と真の父母様を中心に、横的八段階として拡大される世界であつて、私たちがアラインメントすべき縦的軸は、永遠に神様と真の父母様だけであることを知らなければなりません。

桜井正実氏の「真の子女様家庭」にアラインメントするという図は、祝福家庭の位置が、神様―真の父母様にアラインメン

トしていないだけでなく、真の子女様からお孫様、さらにひ孫様へ世代が移るたび、「天の祖

父母様」「天の曾祖父母様」と呼び方が変わってしまい、その

中心も移り変わってしまう

図になっています。これは、「真の父母」から真の子女、真の孫

へと世代が移るたび、その中心

が変わることを意味する問題の

多い図です。そのような世界で

は、世代が移るたびに、摂理の

中心はどこなのか、絶えず探

し続けていかなければならない、

流浪し続ける人類となっております。

桜井節子氏は、家庭連合からの

の脱会を表明する映像の中で、『原理講論』の終末論から、次の部分を用いています。

的なものとして現れる」(173ページ)

『原理講論』のこの論述は、

旧約時代から新約時代への摂理

の飛躍、そして新約時代から成

約時代への摂理の飛躍について

述べているのであって、人類の

真の父母が現れたならば、その

中心が移り変わっていくこ

とは二度とありません。真のお

父様は、次のように語っておら

れます。

「今日、皆さんが知るべきこ

とは、過去や、現在や、未来に

おいて永遠にたたえられ得るそ

的なのです。それゆえ、過去、

現在、未来の全体の歴史をひっ

くろめて見るとき、この地上に

顕現した『真の父母』は、宇宙

の中心を決定する中心ポイント

であるということ、皆さんは

知るべきです」(八大教材・教

本『天聖經』227ページ)

桜井節子氏が『原理講論』の

終末論から「新しい時代の摂理

は……あくまでも対立的なもの

として現れる」という一節を引

用しているのは、事実上、真の

父母様から、顕進様家庭にその

(マルスム選集609-133)、

「孝律！(はい。)」今、処置し

たものは全てわかりますね。

(はい、全て書きました。)」書

いたものを総括的に一度話して

…(顕進様はUPPF会長とG

PFから一年間休み、金起勳

牧師が代わりにするようになり

ました。顕進様はその間、真の

父母様に対する学習、カイン・

アベルの関係を勉強しなさいと

言いました。金起勳が顕進の上

にいてるので長となり、顕進が

待って協助する立場に立つので